

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。Copyrighted materials of the authors.

#### 研究会基本情報

タイトル：「「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)」(平成27年度第1回研究会)

日時：平成27年5月16日(土曜日)午後14時より19時

場所：AA 研306室

報告者1：中村恭子(AA 研研究員)「空虚な坩堝：いまひとたびの壺葬論」

報告者2：内堀基光(AA 研共同研究員、放送大学)「非人工物をどう語るか」

概要：当日は平成27(2015)年度の第一回目の研究会であるため、まず研究代表者の床呂郁哉(AA研所員)より本年度の簡単な研究計画の説明と、今回からの初参加者の自己紹介に続き、いくつかの連絡事項のアナウンスを行った。

その後、中村恭子(AA 研研究員)と内堀基光(AA 研共同研究員、放送大学)の2名による研究報告と参加者全員によるディスカッションを実施した。

その内容は下記の通りである。まず中村は「空虚な坩堝-いまひとたびの壺葬論」と題して、日本画家として自らが描いた複数の作品をスライドで紹介しながら、動物を含むさまざまな「もの」と人間の関係に関して、芸術家としての視点から個別の作品に即して具体的に語った。この内容に関して中村が寄稿した文章を以下にそのまま掲載する。

「カワウソは家族で一つの糞場を持ち、そこでみんなが糞をするそうだ。驚くべきことに、みんなでした糞を定期的に混ぜるといふ。捏ね練り回され、テンパリングチョコレートのようにぴかぴかになって、糞は「異質なもの」となる。カワウソの華麗なる交換がこれだ。

我々は古来から金や宝石などに価値を見出し、それを等価交換することで、さまざまな価値観を流通させて来た。いまでは、たくさんの他者性は一つの等質化された貨幣に挿げ替えられ、超越者となった通貨が暗躍する経済世界へと変貌した。「異質なもの」はすっかり背景に追いやられ、ついには笑い話である。しかし、「異質なもの」の記憶は決して臍げなものでなく、現実に沁みついて、いつでも我々の前に立っている。

自ら再度合一に至らない糞便は、だれにも用無しに埃となって飛んでいくわけではない。春も段々と開け、爛熟した現し身がとけるころには、もうすでに、知らぬところで微生物の蓄えとなり、その分解物が、今度は別の生きものの吹き出す掌となるかもしれない。それらの生命を通過した後、やはりまた、だれも（自らも）与り知らぬところで黄金として働くだらう。もしかすると、知らずのうちに豊作の恵みとして遭遇することもあるかもしれない。しかしそれも、窺い知れぬことである。そして、また排泄する。糞便は、交換において実現するものもその文脈すらも、現前する他者それ自体を封緘した器なのかもしれない。さまざまな自然が全くさまざまなままに共立する視座を凝結し物象化した、異質性の普遍的存在となり得るのだ。

カワウソたちには、異質なものの声がよく聞こえるのだろう。水のように漂うカワウソたちは、濃色の生々しく照り充ちた世界を生き、その黄金さに身を投じて輝き増していく。画面に湧き上がるのは、異質性に興じるカワウソの泥だまと化した姿であり、私はこの様子をつかみ、描き顕すばかりである。このように、かくも糞便の俗称は黄金なのである。

糞便は、こうして、ただ、流れていく。ところで、遺骸もまた同様に、水や土に傾けると、圧倒的な力で流れていく。人は死ぬと遺骸を葬り、そして墓が立つ。焼かれた遺灰は、湿潤な気候では乾燥剤のように水気を蓄え、ぼろぼろに崩れて水のようになる。墓の中にいます存在は、そのようにして朽ちて消え、苔生してもなお、残されたものには黄金の情感を湛え続ける。墓もまた「異質なもの」である。

十七世紀の文人トマス・ブラウンは、著書『ヒュドリオタフィア壺葬論』(1658)において世界各地のさまざまな葬制について語りながら、壺葬を論ずるといふ目的は何処へ飛んで、次第に燃え残った壺の副葬品に興味に移る。まだ青色を保ったオパール、銀の櫛、小さな箱の断片、弦楽器の駒、瑪瑙の猿や蝗、琥珀の象、水晶の胡桃、二百個のルビー、愛馬の蹄。美しい品々の響きが、ブラウンを大いに魅了した。ゲルマン王の墓の金の蜜蜂は、その意匠がエジプト神話と密接な関係を有するという。その蜂が変化して、のちのフランス王家の紋章

である百合の花になったのだという。さらに、本書を翻訳した澁澤によれば、もしもブラウンに東洋の知識があれば、古代中国の葬玉に使う含蝉（死者の口に含ませる蝉の玉器）と結びつけたらうとも言われている（澁澤, 1985）。このように、ブラウンは奔放に脱線を重ねていき、「亡骸が朽ち果てようと焼かれようと、構うこと無し」と、あっさり結ばれる。

墓は多くの場合、それ自体が宇宙に例えられる。一つの骨壺は、無数のイメージが詰まったユートピアだろうか。しかし、コンパクトな宇宙を握りしめて夢想するのでは、永遠に触れられぬ、閉じて彩られた美でしかない。壺中天のように世界を反転させても、今度は一方の側を眺めることができない。現代人にとって、現世・向こう側は、それほどまでに断絶してしまったのだろうか。古代の生命観では、向こう側とはいつでも行き来できる場所にあった。田んぼのあぜ道を歩いて逝った。山の向こうに阿弥陀が立った。ときおり、ブラウンのような者が動き回り、あちらとこちらを具体的な一つに繋いでみせた。墓とは、そのような脱線の物象化された存在として、もうすでに、中のものとは無関係に、「異質なもの」として新たに立ち続けているのだ。五本の指で持ち上げられる重さとなった骨壺の身は、酒のように飛ばされて、空虚な坩堝となったのだ。このように、いかに異質性をのみ確信を持って謳歌できるか。それが、『壺葬論』の真に示すものであり、作品が産まれるということであろう。

昨年、父方の祖父が亡くなった。火葬場では、親戚が二十枚ほどの十円玉を棺に入れた。燃え残った硬貨はご利益があるそうだ。骨上げの際には、宝探しのように遺骨や遺灰の中に散らばった硬貨を選び分けて探し、賑わった。祖父は飛んで、ラッキーコインが出た。私も死んだら見事にラッキーコインが出ると嬉しい。」（以上、「」内は中村恭子による）。

この中村によるプレゼンテーションと語りにつき、全員による質疑応答が行われ、それは「もの」と「こと」の関係や「もの」の贈与をめぐる問題、あるいは中村の個別の作品のモチーフや製作過程にまで及んだ。

次に内堀は「非人工物をどう語るか」と題して、「岩」をはじめとする非人工物と人間

の関係について、サラワクのイバン社会に関する知見を含む人類学的な視点から考察す

る発表を行った。その内容の要旨は下記の通りである。

「『「もの」の人類学』を語る時、その「もの」の存在に関して、人間の意図性が極小であり、しかも人間に対して、ある一定の状況下で可能な限り大きな影響をもたらすものを想定し、その存在をどう記述するかを考えてみたいと思っている。そのために非人工物（と

されるもの)・非加工物へ目を向ける。そうした目は、人を越えた存在への視線として、ある種超越者への目に似たところがある。あえて言えば、それは神への上向ではなく、「もの」への下向という逆向きの動きではあるが、中立的な意味での俗なるものとしての人間中心主義に対する、人間による離反の動きである。

非加工物を語るといっても、それが「物語」的なプロットで語られるとすると、「ひと」ないし「ひと」類似の動作主が、対象としての非人工・非加工物に関わる展開が必要である。「もの」に関わる経験の語りでも同じである。そ例外にはあからさまな擬人化しか残されていない。このパラドクスを回避する方法の一つは、物語的なプロットをもたない言及のしかたを探ることである。実際、そのような言及は可能である。

「もの」として石を取り上げる。参照すべき出発点の一つは岩田慶治の論考である。それらを存在論として読むことをとおして、「ひと」と「もの」にかかわる「存在論」の広がりを考える。「草木虫魚」の語りに代表される岩田の語りの表層のスタイルはあくまでアニミズムにあるのだが、その奥にあるものを探ることに意義を認めたい。岩田の関心はふつう生き物に向かうのだが、そうした「非-人間」も生命体であるかぎりには、人間的エージェンシーの延長で語る事が容易である。そこから発して **non-human** なものをよりラジカルに突めてゆくとするれば、[{ (動物よりも植物) }よりも、やはり石]か、ということになる。たとえば話をすれば、ヨーロッパでは **oak** に代表される樹はよく語るが、石もまた語る。石に多くを語らせたいと思う。

非人工・非加工の石と人との関わり方の変異型は、すべて「躓きの石 (石に躓くという事態)」から「蟬の声のしみいる岩」までの線上に位置づけられると考えている。そこに「あること (あったこと)」自体が人のアクションと人のフィーリングに効果を及ぼす。前者の「効果をおよぼす存在」の所為(「せい」)は物理的接触、後者のそれは視覚(と聴覚)という遠隔感覚によるわけだが、ここからいわゆる五感をとおした「もの」の存在とその効果という一般論に広げていくことも可能であろう。「もの」の臭い(薫り)、味などを含めて、感覚(五感)として現われるものを、世界の「もの」のあり方として見てゆくわけだ。そこでは「もの」が「ひと」に出会うのであって、逆ではない。感覚を「ひと」の身体性に還元して論じるのは、少なくとも部分的には転倒している。(以上、内堀)。

この内堀による発表のあと、参加者全員による質疑応答が実施された。そこでは非人工物における石や岩の位置づけに関する問題、非人工物をめぐる人類学における方法論の問題、あるいは近年の人類学における、いわゆる「存在論的転回」が一体いかなる意味で新しいのか(あるいはせいぜい過去の人類学への「回帰」ではないのか)といった問題をめぐって活発な議論が行われた。